



32 手術あり肺血栓塞栓症予防対策実施率

解説	<p>肺塞栓症は血栓(血のかたまり)が肺動脈に詰まり、呼吸困難や胸痛を引き起こす疾患であり、程度によっては死に至る場合もあります。長期臥床や骨盤部の手術後に発症することが多いです。発生リスクに応じて、早期離床や弾性ストッキングの着用などの適切な予防が重要になります。当該指標は、術後肺血栓塞栓症予防の対策の実施状況を評価するものです。エコミークラス症候群も肺塞栓症の一種ですが、入院中においては適切な診療により、かなりの部分が予防可能です。</p>												
実績	<table border="1"><thead><tr><th>年度</th><th>実施率 (%)</th></tr></thead><tbody><tr><td>平成24年度</td><td>90.4</td></tr><tr><td>平成25年度</td><td>89.7</td></tr><tr><td>平成26年度</td><td>93.1</td></tr><tr><td>平成27年度</td><td>92.7</td></tr><tr><td>平成28年度</td><td>93.4</td></tr></tbody></table>	年度	実施率 (%)	平成24年度	90.4	平成25年度	89.7	平成26年度	93.1	平成27年度	92.7	平成28年度	93.4
年度	実施率 (%)												
平成24年度	90.4												
平成25年度	89.7												
平成26年度	93.1												
平成27年度	92.7												
平成28年度	93.4												
定義	<p>肺血栓塞栓症リスクの高い手術患者に対する予防対策の実施割合です。</p>												